

明日香をさぐる

鬼面の瓦

飛鳥地域で出土した鬼面文の瓦について紹介します。

鬼面文とは字の通り「鬼」の顔を

模した文様です。獣面文とも呼ばれます。今回の話題は、この鬼面文を採用した軒丸瓦です。この瓦は、軒先の瓦の文様が鬼面となっていて、屋根の棟の端にあるいわゆる鬼瓦とは異なります。鬼面文軒丸瓦はその出土数が少なく、謎の多い瓦なのです。

鬼面文の鬼は、その目つきは釣り目となって鋭く、眉毛や髭は火炎のように巻き上がり、額にはとげとげの角のようなものが生えています。そして、威嚇をするように口を大きく開け、牙もむき出しにし、まさに鬼の形相です。鬼氣迫る表情からその荒ぶる呼吸まで

聞こえてきそうです。

この瓦は飛鳥時代の後半頃以降奈良時代の古代寺院跡から出土し、その出土点数はとも少ないです。また、その出土地域も葛城と飛鳥・藤原とごく限られています。そのなかでも、一番集中して出土するのは、葛城市にある地光寺跡です。地光寺跡は奈良時代の寺院跡で、渡来系氏族である忍海氏の氏寺と考えられています。この寺院跡のすぐ隣には葛城坐火雷神社（笛吹神社）があつて、祭神は火雷神と天香山命という火や雷の神様に由来します。

一方、飛鳥・藤原地域では天香具山の南麓にひろがる大官大寺跡

や雷丘の北方に広がる雷丘北方遺跡（雷廢寺跡）、そのほか川原寺跡や西橋遺跡で出土しています。



西橋遺跡の鬼面の瓦

これらの遺跡ではそれぞれ1点のみ確認されていて、その出土数の少なさを考えると、特別な瓦として使用されていたと思われる。その理由を考える上で気になる遺跡が雷丘北方遺跡です。

雷丘北方遺跡は、大官大寺跡の西側にあつたとされる雷廢寺跡と考えられています。この雷廢寺はギョウ山の西側一帯に広がっていた古代寺院で、大官大寺とおなじ瓦が使用されていたことがわかっています。ただし、雷廢寺では瓦は出土するものの伽藍の痕跡が残っておらず、本当に寺院跡であったのかもよくわかっていません。こ

の雷廢寺の近くには、かつて気吹雷響雷吉野大國栖御魂神社があつたことが知られています。この神社は、延喜式神名帳にも登場する由緒ある神社でしたが、飛鳥川の右岸沿いにあつたため、大雨による洪水で流され、明治時代には廢社となつてしまいました。気吹の意味は、息を吐くこと、呼吸、神が吐く息、つまり風などの意味があります。この神社では気吹雷神と響雷神の二柱を祀っていたことが史料に記されており、雷神を祀っていた神社といえます。

風神雷神のイメージと言えば角を生やした鬼の姿が思い浮かびます。雷神と鬼、そのイメージは重なりあいます。とすると、雷とゆかりの深い葛城と飛鳥の寺院跡で出土する鬼面の瓦。まさか、この鬼面、雷様のお顔ではないのか？ そんな憶測が頭をよぎります。お寺の屋根から鬼面の雷様が地域を見守ってください。そして、その下ではたくさん木の柱、たちが支えている。鬼面の瓦は、その地域特有の信仰の形を表しているのかもしれない。

（明日香村教育委員会文化財課）